

# 『逍遙遺稿』札記

— 張船山のこゝ他 —

## ○張船山の詩と中野逍遙・正岡子規・与謝野鉄幹

張船山(一七六四〜一八一四)は、名を問陶、字を仲治といい、船山はその号である。内閣大学士張鵬翮の玄孫にあたり、本籍は四川省遂寧であるが、彼自身は父の任地山東省館陶で生まれ、少年時代はおもに湖北省漢陽で過した。二十五歳の時、挙人となり、二年後の乾隆五十五年進士に第三甲で及第した。この時、第一甲で合格した洪亮吉(字は稚存、一七四六〜一八〇九)とは終生渝らぬ友となった。翰林院庶吉士・檢討、江南道監察御史、吏部驗封司郎中を歴任した後、山東省萊州知府となったが、上官との間に齟齬を生じてこれを任期途中で辞し、嘉慶十九年蘇州で歿した。行年五十一。官界ではさほど振わなかつたもののつとに詩名高く、三十歳の頃に洪亮吉の推称によつて当時八十近い性靈派の領袖で詩壇の大御所でもあつた袁枚(一七一六〜一七九八)に認められ、「老いて死せざる所以の者は、未だ君の詩を読まざるのみ」と囑望されたことは有名な話

## 二 宮 俊 博

である。

その集には、嘉慶二十年(一八一五)刊の『船山詩草』二十巻があり、巻一の楽府が嘉慶元年三十三歳の作であるのを除いて、各巻は年代順に並べられ、巻二から巻十六までが、十五歳から四十歳までの作を収め、巻十七以降は四十以後の作である。更に道光十九年(一八四九)には『船山詩草補遺』六巻が刊行された。そして現在、これらは中華書局刊の中国古典文学基本叢書に収められており、その他、選注に周宇激編『船山詩選』(書目文獻出版社、一九八六年)があつて、その巻末には船山年譜が附せられている。

わが国では、嘉永元年(一八四八)に篠崎弼(小竹)校点序の『船山詩草』三巻が、嗣いで同三年には同じく篠崎弼校点広瀬健(淡窓)序の『船山詩草』二集六巻が刊行された。前者には原刊本の巻一の楽府を除いて、巻二の戊丁集から巻四の出山小草まで船山十五歳から二十六歳の作を収め、後者には巻五の松筠集から巻十の京朝集まで二十七歳から三十歳に至る作を録しており、両者はいずれも現在、

汲古書院の和刻本漢詩集成補編第二十集に影印されている。

船山の詩風については、張維屏（二七八〇〜一八五九）が『国朝詩人徵略』巻五十一に自著の『聰松廬詩話』を引いて、

船山の詩は、生氣湧出し、生趣飛來す。古體中に時に叫囂剽滑（大声でやたらと）の病（欠）有り。當時隨園（袁枚）名盛んにして、遊戯を以て詩を爲る。船山も亦た未だ其の習氣に染むるを免れず。

近體に至つては則ち空靈（清新で）を極め亦た沈鬱を極め、能く刻入し亦た能く清超たり。大いに名理を含み、細かに物情を闡（あき）かす。或いは古を論じて激昂し、或いは情を言ひて婉曲、或いは聲大なること鐘鏞（がね）の如く、或いは味爽なること松韭（あおな）の如くして、幾んど従前諸名家の外に於いて又た一境を關（か）かんと欲す。

と評しているが、恐らくはこれが一般的な見方であろう。

船山詩は、明治時代特にその前半期に、広く読まれたらしく、漢詩人としても名を馳せた久保天随（明治八〜昭和九）は、昭和五年刊の統国訳漢文大成『高青邱詩集』の総説の中で、「大抵、邦人の詩を學ぶや、はじめ張船山より入り、而して明の高青邱、而して宋の陸放翁、これを其鐵門限となす。船山詩草は前半、放翁は詩鈔、ともに覆刻あり。三家の詩、ひとり平易解し易きのみならず、兼ねて、その書の得易きに因りて、自然流傳の廣きを致せしものと思はる」と指摘回想している。

自然な性情の発露を重んじ、「僻典を用て人の耳目を銜（く）はず」（篠崎小竹の序）、ために「平易」ともみなされるのであろうが、とりわけその若々しい感受性や熱性に富む心情が真率に時に感傷的に表現されている張船山の青年期の詩篇が、和刻本を通して明治の若者た

ちの一部にそれぞれ濃淡強弱の色あいの差こそあれ、迎え入れられたのは確かなようで、その一端をこれから中野逍遙・正岡子規・与謝野鉄幹の三人についてみてゆきたいと思う。逍遙と子規は慶応三年、鉄幹は明治六年生まれで、いずれも幼少期に漢学の素養を身につけ、子規と鉄幹は少年期その文学活動の始めに漢詩を作ることに熱中した経験を持ち、逍遙は「古詩型の新詩才」（日夏耿之介の語）として明治浪漫文学史にその名を留めている。

中野逍遙が張船山の詩を読んでいたことについては、実はすでにこれまでの札記の中で言及したことがある。

例えば明治十九年八月作の「將に東都に向はんとして留別す」二首其二（『逍遙遺稿』正編）に、

秋風吹濕蛾眉面 秋風吹いて蛾眉の面を溼らす

醉指水天天盡畔 醉ふて水天を指せば天尽くる畔（はた）

憐君一點淚香痕 憐れむ君が一点涙香の痕

染入客衣不堪澣 染みて客衣に入りて澣（あ）ふに堪へず

とあるが、このうち三・四句は、張船山二十六歳の作「嘉陵江上立春、内に寄す」六首其五（和刻本『船山詩草』巻三、出山小草※以下、『船山詩草』の引用は和刻本の巻数による）

客行日已遠 客行 日（ひ）已に遠く

碧草新愁滿 碧草 新愁滿（つ）

香淚在征衣 香淚 征衣に在り

因君不忍澣 君に因りて澣（あ）ふに忍びず

の後半二句を踏まえた表現であることは、拙稿『逍遙遺稿』札記一

狂殘痴詩其六について——(樞山女学園大学研究論集「第二十三号、一九九二年」)の中でも指摘しておいた。ちなみに、近年、中国においてもわが国の漢詩に関心が寄せられているらしく、簡単な語釈をつけて紹介する書物が幾つか出版されているようだが、そのうちの二冊、王福祥・汪玉林・吳漢櫻編『日本漢詩摘英』(外語教学与研究出版社、一九九五年)を繙いてみると、逍遙のこの詩を収録し、結句に注をつけて清人黄景仁(仲則)「山鏗」詩の「沙辺少婦来つて衣を漉ひ、稚子自ら林間の扉を守る」という二句が引いてある。だが、詩意や措辞からみてそれが失当であることは疑いない。

この他、中野逍遙には、その詩文の中に直接、張船山の名を挙げて引用する例がある。昨年刊行された中野逍遙研究史上初の專著で、逍遙の故郷伊予宇和島の風土と文化に造詣が深く長年にわたつて逍遙やその周辺の人々に関する貴重な資料を発掘されて来られた川崎宏氏の『中野逍遙の詩とその生涯——夭折の浪漫詩人』(愛媛県文化振興財団、一九九六年三月)に示されている逍遙二十歳の旅日記「涙華紀行」、これは明治十九年八月二十二日、十日許りの帰省を終えて宇和島を発ち、九月二日東京に至る間の日記であるが、その中に、

一乃ち張問陶が遂寧を辞するの詩

高堂雪鬢如垂絲 階前再拜將安之 附書他日空傷別 何似  
臨岐立少時 市橋水濁流偏駛 水清不照遠遊子 關山遼闊  
客心長 萬里之行從此始

を三誦して旬日の残夢を十里の家山に留め、江上の波は美人の涙と共に東方万里の舟を送りぬ。

と、張船山の名が見えている。なお、最初に掲げた逍遙の留別詩もちょうど同じ時の作で、名残りを惜しみ逍遙の旅衣を涙でぬらした

美人というのは、どうやら親戚のむすめの「おしづさん」を念頭に  
おいているらしいのだが(『逍遙遺稿』札記「故郷の恋人のこと他」)「樞  
山女学園大学短期大学部二十周年記念論集」(一九八九年参照)、実際に、別れに  
臨んで二人の間にそれほどの愁嘆場があつたかどうかはあえて詮索  
することもないだろう。それはともかく、ここに引かれている詩は、  
船山二十六歳の作で原題を「己酉十一月七日、遂寧の西門橋下に家  
人に別る」(『船山詩草』卷三、出山小草)といい、その後半部であ  
る。簡単な語釈を附して挙げておく。

去年話別青春深 去年 別れを話して青春深く  
燕山落日多歸心 燕山の落日 帰心多し

今年暫歸足高寄 今年 暫く歸りて高寄足り

車馬催人随計吏 車馬 人を催して計吏に随はしむ

能分骨肉是浮名 能く骨肉を分つは是れ浮名

似此毛錐眞可棄 此の似き毛錐 眞に棄つ可し

高堂雪鬢如垂絲 高堂の雪鬢 垂糸の如し

階前再拜將安之 階前に再拜して將に安にか之かんとす

附書他日空傷別 書を附せば他日空しく別れを傷まん

何似臨岐立少時 何ぞ似ん岐に臨みて立つこと少時なるに

市橋水濁流偏駛 市橋 水濁りて流れ偏へに駛く

水清不照遠遊子 水清むも遠遊の子を照らさず

關山遼闊客心長 關山遼闊として客心長く

萬里之行從此始 萬里の行は此れ從り始まる

○話別 別れにのぞんで語らう。別れの挨拶をする。○青春深 春だけ  
なわ。○燕山 北京附近の山々。○高寄 齧齧とした現実を離れのびの  
びとした心持ち。○随計吏 計吏は、漢代、年に一度都に上つて地方の

財政報告をした官吏。その際、朝廷に推挙される人材を伴って上京したことから、「計吏に随ふ」とは、首都北京での進士の試験に赴くことをいう。○浮名 実体の伴わない名。○毛錐 筆。転じて詩文の才。○高堂 座敷。父母の居る所から転じて父母を指す。○雪鬢 白くなった鬢。○糸 絹糸。白髪を喩える。○附書 手紙を寄せる。○何似 くと比べてどうか。如かずの意。○岐 分れ道。○少時 しばし。○関山 辺境の山並み。ここでは四川の山々。○遼闊 果てしなく続く。○万里之行云々 三国時代、蜀の費禕が呉に使いする時、成都城外の橋のたもとで「万里の路は此の行に始まる」と嘆じたという。

更に、もう一つ、明治二十五年十二月作の「狂残痴詩」十首の後序（「逍遙遺稿」外編）に、

―昔者、林西崖綠端硯を贖ひて、家に藏す。故張船山の高祖の寶とする所なり。西崖、船山の詩を讀みて、之を愛し、贅して門に入る。而して端硯は豫め納綵の物と爲す。狂残の詩、篋底に朽ちんか、將た南枝の縁を續がんか。之を讀むは人に在り、得失は皆天のみ。―

と記して、船山のいわゆる硯縁の故事をわが身に引き較べて述べる例がある。「狂残」の狂は狂骨子中野逍遙、残は残月子佐々木信綱のことで、兩者兩様に恋の悩みを抱き悶々としていた時期の作である。「南枝」は南条貞子、逍遙が報われぬ想いを捧げていた女性。さて、張船山の硯縁の故事というのは、『船山詩草』卷三、出山小草に見え

婦翁林西厓先生、初めて成都縣に任せられし時、人有り古硯を持して售らんことを求む。匣上玉符あり、一符の下に銘有り。其の末に云ふ、錫ふに大君自りす。之を渠厦（大きな建物の）に藏す。

子孫之を寶とし、有徳者に傳へよと。翁、故家（由緒ある家）の賜物爲るを知り、贖ひて之を藏す。後二十年、余、其の家に贅（とどまる）して之を見る。實に先（今は）高祖文端公（の諡）の千叟宴（康熙五十年宮中）に赴きし時、仁廟（康熙帝）の賜ひし所の綠端硯なり。族人の鬻ぐ所と爲る。婦に述ぶるに、婦以て翁に告ぐ。翁、驚喜して硯を以て余に歸し、且つ曰く、吾始め君の詩を讀みて之を愛す。因つて女を以て君に妻す。豈に二十年前に君が早に此を以て納采（めい）の物と作さんと意はんやと。余固より徳に傳へよの言に副ふに足らず。然れども得失は數（めい）有り。婚姻は縁有り。亦た奇とするに足るなり。硯縁詩四首を作り之を誌す。

これは、船山二十六歳の作。最初の妻を三年足らずの結婚生活で失なつた後、二十四歳の時に娶つたのが林偶（字は西厓）の女佩環で、先に挙げた「嘉陵江上立春、内に寄す」詩は、この二度目の妻林氏に寄せた作である。

以上、中野逍遙が張船山に言及している箇所を挙げたが、次に正岡子規についてみてゆくことにする。

子規の場合には、二十三・四歳の頃に張船山の韻に次する詩を四首作り（講談社版『子規全集』第八卷漢詩稿）、文科大学国文科二年次のノートに『船山詩草』からの摘句を書き留めている（『子規全集』第二十一卷草稿・ノート）。まず、次韻詩の実例を一つ示しておこう。

明治二十三年の作に「新年書懷 言志会席上次張船山韵」と題する詩がある。

海外未能傳姓名。海外未だ姓名を伝ふる能はず  
又迎元且若為情。又た元且を迎ふ 若為なる情ぞ

千秋功業悠と遠。千秋の功業 悠々として遠く  
廿歳星霜忽と征。廿歳の星霜 忽々として征く

夜半学文嗟病骨。夜半 文を学びて病骨を嗟く  
古来成事在書生。古来 事を成すは書生に在り

倦凭破几貪閒睡。倦みて破几に凭りて閑睡を貪れば  
夢遠英州龍動城。夢は遠る英州龍動城

「龍動」はロンドンの宛字。詩形は七言律詩で、韻字は名・情・  
征・生・城（下平声庚韻）。

これは、『船山詩草』卷二、戊丁集の「臘月初一日、燕子磯にて陳  
棟園典曹父子に遇ふ」詩、

隔水何人識姓名。水を隔てて何人か姓名を識らん  
推篷乍見若為情。篷を推して乍ち見る若為なる情ぞ

煙波執手皆疑夢。煙波 手を執り皆夢かと疑ふ  
天海驚心共遠征。天海 心を驚かす共に遠征

梗泛十年憐薄宦。梗泛十年 薄宦を憐れみ  
萍蹤千里笑浮生。萍蹤千里 浮生を笑ふ

忽忽又作鑿江別。忽忽として又た作す鑿江の別れ  
今夜孤帆鐵甕城。今夜 孤帆 鐵甕城

の韻字をその順序通りに踏んだものであるが、読み比べてわかるよ  
うに、正岡子規の次韻詩はもとの船山の作とはテーマにおいても内  
容の上でも全く関連するところがない。ちなみに、幕末から明治前  
期の漢詩壇にあってつとに清詩を鼓吹し、自身も張船山の絶句を含  
む『清三家絶句』（他に陳碧城、郭頻伽）を明治十一年に刊行した森

春濤（文政二〜明治二）には「冬日遣懷用張船山韻」と題する七律  
『春濤詩鈔』卷九）があるが、これは船山の「冬日遣懷」詩（『船山  
詩草』二集卷六、京朝集）に次韻した作で、同一の題目テーマに依  
りつつ原詩とはまた違った感慨を詠じている。一般に古人の詩に次  
韻する場合には、もとの作品を多少なりとも意識しながら新たな詩  
趣を作り出そうと試みるのが普通であるように思われるが、その点  
から言えば、子規が張船山詩に次韻した四作は、いずれもただ韻字  
の配列の仕方を倣ったというに過ぎないようである。他の三作につ  
いて、その詩題と韻字及びそれに対応する船山の詩を示すと、次の  
通りである。

〔明治二十二年〕

○十二月五日内藤先生宅開言志會席上次船山集中韻

七言律詩 韻字：枝・詞・離・詩・糸（上平声支韻）

〔原〕『船山詩草』卷一、戊丁集「春日感懷」詩

○同席一戲作歲晚詩次船山詩韵律体

七言律詩 韻字：驂・貧・担（擔）・南・藍（下平声覃韻）

〔原〕『船山詩草』卷三、出山小草「滿城道中望西山」詩

※藍字、〔原〕は藍に作る。

〔明治二十三年〕

○春郊散策圖次張船山詩韻

七言律詩 韻字：齊・西・低・啼・溪（上平声齊韻）

〔原〕『船山詩草』卷四、出山小草「晚過修武」詩

子規が張船山詩に次韻を試みているのは、すべて明治二十二年十  
一月に内藤鳴雪（南塘）・竹村鍛（鍊卿）と共に起した漢詩や俳句の  
会、言志会席上のことであって、そこには師友と競い合い楽しみな

がら詩や句を捻るといった知的な遊びの要素が多分にあつた。その意味では、先に述べた中野道遥や後でみてゆく与謝野鉄幹の場合とは異なる張船山詩受容の仕方が見られる。わが思いの丈を表現するために直接自らの詩文の中に張船山の名を挙げたりその語句を引用するといったことは、子規にはない。ただそうではあつても、国文科二年次の明治二十五年三月四日附のノートに「雑録」として、『船山詩草』第二集巻一、松筠集の中から幾つか摘句してこれを書き留めているから、子規がそれなりに『船山詩草』に関心を持ち、かなり読みこんでいたことは確かなようだ。子規の好尚を窺う意味で、次に参考までに挙げておく。

船山

- 直使天驚真快事能遭人罵是奇才 …………… (A)  
 天若有情猶識我人如無命不須才 …………… (B)  
 便将奇壽敵鴻荒。轉眼終須致北邙。  
 佛老看空聊縱酒。海天遊遍且思鄉。  
 竟逢知己何妨死。未遇傾城不肯狂。  
 夢踏翠虛陪上帝。笑看傀儡競登場 …………… (C)  
 小婢上燈花歎暮蠻奴掃雪帚無聲 …………… (D)

(A)は、「孫淵如星淵前輩の雨粟樓に題す」(七律)の頷聯。

直とだ天をして驚かしむるは真に快事、能く人に遭つて罵るは是れ奇才

(B)は、「仏前に酒を飲み浩然として得る有り」四首其二(七律)の頷聯。

天若し情有らば猶ほ我を識らん、人如し命無くんば才を須ひひず

○命 天命の意。

(C)は、(B)の詩の其四(七律)

便たひ奇寿を持つて鴻荒に敵せんも、眼を転ずれば終に須らく北邙ほくやうに到るべし。仏老看ること空にして聊か酒を縦たたまにし、海天遊ぶこと遍あまく且つ郷を思ふ。竟つひに知己に逢はば何ぞ死するを妨げん、未だ傾城に遇はざれば肯へて狂せず。夢に翠虚を踏ふみ上帝に陪ともし、笑つて看る傀儡競つて登場するを。

○奇寿 例え、黄帝が三百歳まで生きたというようなとんでもない長寿。○敵 相手にする。匹敵。○鴻荒 太古の世。○転眼 あつという間に。○北邙 洛陽の北にある山名。古来、墓地として有名。○仏老 釈迦や老子。○海天 海内。中国各地。○傾城 絶世の美女。○翠虚 大空。○上帝 天帝。○傀儡 操人形。下らない人間どもの喩え。

(D)は、「春日内を憶ふ」詩(七律)の頷聯。

小婢燈火を上して花暮れんと欲し、蛮奴雪を掃つて帚に声無し

※「欲」字、『子規全集』では歎に作る。  
 以上、正岡子規が張船山の韻に次した作とノートに抜き書した詩句とを挙げたが、最後に与謝野鉄幹についてみてみよう。

鉄幹の場合、明治三十四年彼が二十九歳の時に上梓した第三詩歌集『鐵幹子』の中に、「懊惱」と題する新体詩があつて、そこに張船山の名が見える。

この詩は、「一劍天下の志」を抱きながら、「吾運拙く」支那朝鮮での雄飛の夢破れ鬱々とする(若もの)に、「老いたる友」と(若き友)とがそれぞれ慰藉激励の言葉をかけ、それに応えて(若もの)が己れの心境を吐露するという構成になっており、「若もの」の姿に

鉄幹自身が形象化されているばかりではなく、二人の友それぞれが揺れ動く鉄幹の思考心情を反映した存在となっている。そして三人の言葉は四行一連の五連ずつで示され、すべて十五連六十行にわたる長詩である。

最初に登場するのは〈老いたる友〉で、この男もかつては少年の血を滾らせ功名を夢見たこともあったが、今ではすっかり家産を蕩尽して帰るべき故郷を失ない、係累を抱えたまま裏長屋での佗暮し。その男がいう、

そぼふる窓に書を讀めば／船山が詩の悲しきや／  
見よ歌ひてはふるさとを／戀ふる涙のあつき哉

げに功名は何者ぞ／少年の血を激しては／  
南船北馬徒らに／黄金を盡し身を破る

これに対して、血気に逸りいまだ挫折の苦味を嘗めたことのない〈若き友〉は、「老いたる人の繰言に／耳傾くる事なかれ／など書をよみし若者の／その悲みを知らざらん」と〈若もの〉に訴え、

三十にして名をば揚げ／四十にしてぞ山に入る／  
鬢に白髪の生ひざらば／英雄死すとも悔あらじ

げに心地よき船山の／この句を吾はとらん哉／  
夜半の劔に光なきも／たけき男の子に希望あり

と己が抱負を熱く語りかける。しかし、〈若もの〉にとっては、結局

二人の友の忠告も己が懊惱を救うまでには至らない。夢破れたからといって佗住まいに空しく埋れ朽ちんにはまだ熱き血が冷え切っておらず、ただ勇ましいだけの大言壮語に振り立つにはあまりにも現実の壁の厚さを知りすぎた。〈若もの〉の迷いは深まりこそすれ、新たな希望は見い出せず、ただ「おのが詩を市に抱きて獨泣く」ばかり。そして最後は、

老いたる友よありがたき／君が諫にたゆたひぬ／

心こころの友よ勇しき／君が言葉をはたいたかにせん  
と結ばれて、「懊惱」詩は終っている。

この作品の中で〈若き友〉が引いているのが、張船山十五歳の作「壮志」詩の冒頭四句で、これは『船山詩草』巻一、戊丁集の巻頭に載せられている。

三立功名 三十にして功名を立て

四十退山谷 四十にして山谷に退く

不見兩鬢霜 兩鬢の霜を見ざれば

英雄死亦足 英雄死すとも亦た足る

咄嗟少年子 咄嗟 少年子

如彼玉在璞 彼の玉 璞に在るが如し

光氣未騰天 光氣 未だ天に騰らず

颯颯抱之哭 颯颯として之を抱きて哭す

人生不得志 人生 志を得ず

天地皆拳曲 天地 皆拳曲す

慷慨對中原 慷慨して中原に対す

流年何太促 流年何ぞ太だ促かなる

落拓大布衣 落拓たる大布衣

許身非碌碌 身を許すは碌々たるに非ず

四十四萬言 四十四萬言

隱軫匡時略 隱軫たり時を匡すくふ略りゃく

爲天子大臣 天子の大臣と爲り

上書繼臣朔 上書して臣朔を繼がん

○足 満足。○咄嗟 嘆息の聲。○璞 あらたま。掘り出したままで磨

かれずにいる玉。すぐれた才能がまだ世に出て真価を發揮していないこ

との喩え。○魍魎 よるべないさま。○拳曲 かがまる。○中原 中国

の中央部。○落拓 氣宇壮大なさま。○布衣 まだ仕官せずにいる書

生。○許身 自負する。○碌碌 平凡なさま。○隱軫 盛大なさま。○

匡時略 時世の病弊を芟除し改革する意見政策。○臣朔 朔は、漢の東

方朔のこと。武帝に対する上書の中で、十六歳で詩書を十九歳で孫呉の

兵書を学び、あわせて四十四萬言を誦することができるという、勇なる

ことは孟賁、捷なることは慶忌、廉なることは鮑叔、信なることは尾生

の如くであつて天子の大臣となるにふさわしいと述べている(『漢書』東

方朔伝)。

張船山のこの詩は、まだ世に認められてはいないものの、己が才能を自負して天下に為すこと有らんと切に期し、一旦功成れば富貴に恋々とすることなく潔く身を退きたいと願う、いかにも若者らしい熱情に溢れた述志の作だが、それだけに明治の若き政治的文學的浪漫者の好みに適いその胸を熱くしたのだといえよう。

その一方、(「老いたる友」の言葉の中に見える「南船北馬」の語も、実は『船山詩草』にしばしば用いられており、張船山十九歳の作「驕旅行」(卷一、戊丁集)に

男兒生不識故郷 男兒生まれて故郷を識らず

南船北馬伊胡底 南船北馬 伊れ胡こくに底もとらん

二十三歳の作「初めて遂寧に帰りて作る」詩(卷一、戊丁集)に

北馬南船笑此身 北馬南船 此の身を笑ふ

歸來已是廿年人 帰り来れば己に是れ廿年(はやく)の人

二十六歳の作「人日偶たま作る」詩(卷三、戊巳集)に

南船北馬儘飢疲 南船北馬 儘ほどく飢疲し

皮骨空存不支病 皮骨空しく存して病を支へず

等の用例がある。

官界に踏み出す上での最大の難関、進士及第をめざし生計を講ぜんがために、故郷を離れ家人と別れて、旅食の索漠たるに耐え風沙

に飽く、文字通り南船北馬の日々を重ねた若き船山の詩には、壮志

雄心を抱きつつも一方で当然ながら懐郷の念を詠じた作も多く、自

待とはうらはらに失意が顔をのぞかせることもままあつた。

船山二十三歳の作「峽に入りて病中亥白兄の作に同ず」詩三首(卷

二、丙午集)は、兄の張問安(字は亥白)の作に唱和したものが、

其二には、

廿載爲兄弟 廿載 兄弟と爲り

謀生事事違 生を謀るも事々違ふ

一寒何至此 一寒 何ぞ此に至れる

三匝竟無依 三匝(さんさつ)して竟(つひ)に依る無し

齒壯親逾老 齒壯(はなはち)にして親(おや)逾(い)よ老い

心枯髮漸稀 心枯れ髮漸く稀なり

相看懷往事 相看て往事を懐ひ

熱淚灑春衣 熱淚 春衣に灑まぐ

熱淚灑春衣 熱淚 春衣に灑まぐ

と詠じられ、そこには相手が兄という心易さからか、おもわず「熱き涙」を零す船山の姿を見ることができぬ。

おそらくは、こうした詩例を踏まえて、「若き友」が共感する「壮志」とは相反する船山の一面を「老いたる友」が汲み取っているのであらうけれども、但し「歌ひてはふるさとを戀ふる涙のあつき哉」とか「南船北馬徒らに黄金を盡し身を破る」といった述懐そのものは、『船山詩草』中の語が用いられているとはいへ、その心情が完全に一致するというわけがなく、「老いたる友」の場合にはより感傷的に詠じられているように思われる。

以上、与謝野鉄幹の「懊惱」詩とそこに引かれている張船山詩とについて私見を述べた。

\* \* \*

このノートでは、中野逍遙・正岡子規・与謝野鉄幹の三人について、明治期に広く読まれたという張船山詩との関わりを具体的にみてゆこうと試みたのであるが、彼らの引用している船山の詩句や次韻した作品の原拠を列挙するにとどまり、ごく表面的な一瞥に終始してしまった。それに三人の作品すべてに眼を通したわけではないので、さだめて遺漏も多いことと思う。このように、論考というには不備きわまりない代物だが、それでも明治期における張船山詩の流行ぶりや受容の一端を多少は垣間見ることができただけではなからうか。『逍遙遺稿』札記の一篇として、私なりに気づいたことを覚書としてまとめた所以である。

○正岡子規の「題中野君所示文後」詩について

前稿『逍遙遺稿』札記「鶴鳴いて月の都を思ふかな 子規と逍遙——」（『檀山女学園大学研究論集』第二十七号、一九九六年）において、中野逍遙と正岡子規との関わりを逍遙の子規宛書簡や子規の逍遙追悼句を中心にみてきた。その際、明治十七年ともに大学予備門に入り、高等中学二年の時には同じ組でもあったこの二人が、「互いに親しく言葉を交わし往き来するようになったの具体的にいつごろからかは今のところ不明だが、ある程度交際が密になったのは、どうやら明治二十六年になってからのことだと思われる」と書いたのだが、今回改めて講談社版『子規全集』第八巻の漢詩稿を繙いてみて、子規に明治二十四年作の「書中野君所示文後」（中野君の示す所の文の後に題す）という七律があるのに気づいた。

当時、子規の交友圏内に在って、中野姓であってしかもその人の文章を読んだ感想を漢詩にまとめてこれを示すといった相手は、文科大学漢学科に進んだ逍遙中野重太郎を措いては他に考えられない。とすれば、この子規の詩が、現在、二人の直接の交流を物語る最も早い時期の作ということになる。

子規の七律というのは、次のような詩である。

千里芳魂無処尋 千里芳魂 尋ぬるに処無く  
 每思往事轉難禁 往事を思ふ毎に転た禁じ難し  
 菱花不照彩鸞影 菱花 照らさず彩鸞の影  
 錦字空留青鳥音 錦字 空しく留む青鳥の音  
 月落寒房香夢冷 月 寒房に落ちて 香夢冷やかに  
 苔封孤塚落紅深 苔 孤塚を封じて 落紅深し



『逍遙遺稿』札記

ことを知ったので、ひとまずここに書き加えておく。

(一九九七・九・二二)